

# 母塾

2019・10・8

VOI-26



新小岩幼稚園・未就園児クラス

illustrated by kurumi

## 『 あこがれを追いかけて 』

アドバイザー 猪之鼻晴子

お引越して9月から2の星組に入ったコウヘイクンはカッコいい。  
背もクラスで一番高いし、走るのも速くりレーのアンカーをしている。  
クラスに入ってもすぐにみんなの中に入り、リーダーのように遊んでいる。  
同じマンションで同じクラスになった我が家のロクは毎日コウヘイクンの話をする。  
「コウヘイクンね、高いところからピョンって飛べるんだよ。」  
「コウヘイクンね、小学校のひととお友だちなんだよ。」  
人見知りのロクはマンションにお友だちがいないのに、コウヘイクンは大きなお兄ちゃんと  
すっかり仲良くなっている。「コウヘイクンね、。。。」

子どもは自分がどうしたら成長できるか？ということは無意識に追っている。  
どうしたらあんなに速く走れるのか。どうしたらお友だちに手紙が書けるようになるのか。  
知らない子と遊ぶ方法、みんなを笑わせる方法、なわとび、自転車、。。。。  
自分が成長するのに、お手本を追いかけている。  
それはおとなだと見えづらい。もう当たり前に出てしまっていて、魔法にしか見えないから。  
ママの夕飯の手順は見えない魔法。パパの車の運転も魔法。  
自分がどこでつまづいているのか、あと少し何が足りないのかが見えるようなお手本を探す。  
それは同じクラスの子やひとつ上の学年の子になる。  
家の中にお兄ちゃんお姉ちゃんがいると、「ケンカになるから離れなさい。」と言っても  
下の子がしつこく追いかけていくのは、泣かされてもいいから一緒に居たいのだ。  
「ケンカばかりするからあの子と遊ばなければいいのに。」と思うけれど、  
子どもはクラスでも家でも磁石のように誰かとくっついている。  
自分を成長させてくれる相手は無意識に選んでいるのだ。

名選手は名コーチにはなりづらいという。  
名選手が当たり前に出てしまうことが、他の選手には魔法としか思えない。  
自分より少しレベルの上の技術の選手はどこにつまづきがあるかわかってもらえるので、  
質問にも答えてもらえる。ちょうどいいヒントをくれるのだ。

中一の卓球部の三男ジョウは張本選手より2年生のキャプテンをカッコいいと思う。  
大学受験を終えた長女よりも、高校受験したばかりの次男に数学を訊いている。  
ひとは自分も手が届きそうな目当てがあることが一番の喜びなのかもしれない。  
おとなも「カッコいいな、あんなりたいな。」というあこがれがあれば。  
手のまったく届かない相手にはひとは嫉妬はしない。  
「いいな、どうしてあんなにカッコいいんだろう。」と嫉妬できたら、それは自分の一番のお手本  
を見つけた証拠だ。きっとそのひとのようになれる。  
ロクがコウヘイクンを追いかけるように純粋に追いかけたらと思う。

harukoinohana1717@gmail.com